

ず、そもそもトルコ語に翻訳されない。3つめは、主人公の成長である。単に平和な日常を描くのではなく、時に挫折しながら、主人公が友人や師と協力して身体的にも精神的にも成長していく過程は、読者に共感を引き起こし、人気を獲得しやすい。こうした性格を

もつ日本のマンガが特に人気を博し、トルコでも多くの人々を楽しませている。

引用文献

シータヒーリング. 2023. <<https://www.thetahealing.com/ja/>>

おしゃべりして待つ

——カメルーン北部ンガウンデレの暮らしとウシのこと——

新 川 ま や *

ンガウンデレの街並み

わたしがくらす街の名はンガウンデレという。中部アフリカ、カメルーンの首都ヤウンデから北に電車で半日、カメルーン唯一の鉄道カムレールの終着駅が、ここンガウンデレにある。

街を歩くと、切り落とされたウシの頭や尻尾、内臓が目につく。薄く叩き伸ばされた牛肉や牛皮が道端に干されている。なかなか舗装されない赤土の道に目をやると、ウシの足跡に出くわす。ウシ市か、と畜場か、それとも村へ帰るのか。せわしく人が行き交う街中を、ウシの群れも堂々と行く。

群れの後ろを、1メートルほどの木の棒（*sawrou*¹⁾）を手に持った牛飼（*Gainako*）

の青年が歩いている。ウシを飼養するのは、決まって「村フルベ（*Fulbé laddé*）」あるいは「ボロロ（*Mbororo*）」と他称される人びとだ。村フルベの人びとは、「街フルベ（*Foulbé wouro*）」の人びとからウシを預かり、飼養する。その代わりに、彼らはウシの



写真1 ンガウンデレ駅の前を行くウシの群れ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 文中のフルフルデ語はすべて、カメルーン・ンガウンデレ地域方言で表記。

ミルクやヨーグルトを売ることができる。また雨季には、トウモロコシやマメを栽培し生計を立てている。

雨で道がぬかるんで肌寒い日も、砂埃が巻きあがり、灼熱の太陽が照りつける日も、牛飼いはウシ市から数十キロメートル離れたウシ市へ、あるいは村から水場へと日がな一日ウシとともに歩く。

人びとのおしゃべりから

はじめてンガウンデレを訪れた時、わたしは大してウシに関心はなかった。それどころか調査テーマもきちんと定まっていなかった。ただ目の前に起きる些細な出来事に、普段よりも一喜一憂しながら、生活に一生懸命だった。

この頃のわたしの仕事といえば、もっぱら自分の存在を人びとに見せることだった。よく知らないこの街を、丁寧に歩き、人に話しかけたり、かけられたりしておしゃべりの輪に入っていく。

店先のベンチに座ったり、礼拝用マットを尻に敷いたりして、日の当たらない涼しい場所でピーナッツやサトウキビを片手に友人との会話を楽しむ。

お題は近所のゴシップやカネのこと、カメルーンと日本の政治や文化の話などさまざま。話し疲れると通行人を眺め、コーヒーや茶をちびちびとすすむ。わたしはひととおり話終えると立ち上がり、「アッラーがあなたに祝福を与えてくださいますように」といって別れを告げ、また別の輪に入っていく。

仕事のない人はもちろん、仕事の手を止め

ても、人びとはおしゃべりに勤しむ。このように、おしゃべりをして暇をつぶすことをフルフルデ語でファード (*faadah*) という。

「ニーハオ、ブランシュ。君は昨日あそこの交差点でファードしていたろう。」

「ジャポネ、今日もファードか。新しいニュースはなんだ？」

このひとことで「中国人」「白人」あるいは「日本人」と見られているわたしも、ずっとファードの輪に馴染んでいく。それはまるで、このよく知らない広い街がだんだんと狭くなるような感覚だ。

わたしはこのファードのなかで研究テーマを見つけた。

たとえば次のようなはなしである。ソファァ職人のアダム (50 代男性) は、ファードのなかで、ふと「1 月になったらウシを 1 頭買う。もし年末までにもうひとつソファァが売れたら、2 頭買う。今年は金がなくて、子どもたちの進学のためにウシを全部 (2 頭) 売ってしまった」と呟いた。

また、「Faadah Quartier Bali (バリ地区のおしゃべり仲間)」というファードのメンバーによって構成された WhatsApp のグループチャットには、家族・友人の写真やウェブニュースの記事とともにウシの写真が送られてくる。そこには、「ウシは神からの祝福を持っている」というメッセージが添えられていた。

2 回目の調査がはじまり程なくして、この街随一の大富豪アラジ・アッボがトルコでの療養中に亡くなった。すると、道端でおしゃべりする人びとの関心は、彼の所有するウシ

を、4人の妻と36人の息子・娘たちがどのように分け合うのかということに集中した。

ンガウンデレの金持ちは皆決まって、ウシを何百、何千頭と所有している。うわさでは、彼は4万7,000頭ものウシを所有している。1頭あたりの平均価格は25万CFAフラン（中央アフリカCFAフラン：以下フラン、約6万円）だから、この数には圧倒される。ンガウンデレでは、多くのウシを持つことは富者の象徴である。

ンガウンデレの人びとは、稼いだ金をウシにかえて貯蓄することを好む。たとえば、10万フラン（約2万4,000円）で1歳の仔牛を1頭購入すれば、2年後には30万フラン（約7万3,000円）、3年後には40万フラン（約9万7,000円）というように、ウシの成長とともに「貯蓄額」が増えるからだ。

だが、人びとは全財産をウシにかえようとは考えない。ウシの窃盗がはびこる当地域では、ウシの預託料と信頼できる牛飼い、定期的にウシを預けている村まで出向いてウシの生存確認をするだけの時間と労力を確保できなければ、ウシは容易に盗まれてしまうからだ。

ところで、こうしたウシの話好むのが、ウシを飼養する「村フルベ」なら納得できる。だが、わたしがはなしを聞いた人びとはソファール職人や服の仕立て職人、起業家や学生、仕事のない人など、一見するとウシとは関係ないような生活を送る人びとだった。

このような体験が重なると、私は、やむなくウシを中心にものを見たり、考えたりするようになった。毎日のつとめである街歩き

は、徐々に郊外のウシ市へと伸びていった。ウシのことを知るためには、牛飼いやウシの商人（*Palké*）、取引の仲介者（*Sakaina*）、牛肉の卸商人（*Bangaaro*）、市を管轄する政府関係者や伝統的権威者（*Sarki Tiké*）、そしてカメルーンの北部やはるばるナイジェリア、チャドからやってくるさまざまなウシが集まるウシ市に出向くことが最良と考えたからだ。

ンガウンデレのウシ市

ンガウンデレ近郊農村では、大小14のウシ市が開かれる。それぞれ開場は1週間に1度で、毎日1～2カ所で市が開かれている。

市でひとときわ目を引くのは、商人たちだ。10枚ずつ綺麗に仕分け、輪ゴムで括られた大量の札束を片手に、売り出されたウシの周りを囲んで大きな声で言い合っている。「こいつは先週28万フランで買ったウシだ。30万フランで売ってやろう」「いや、こいつはあいつよりも小さいからもっと安くしろ」といった具合に、売り手が買い手の手を取り、日傘のなかや周りに背を向けてひそひそと話し始めたら、取引もいよいよ終盤だ。



写真2 賑わうウシ市のようす



写真3 カネを慎重に数えるウシ商人と筆者

「たとえそれが贈り物だとしても、カネはしっかり数えろ」とは元ウシ商人の古老が教えてくれたことであるが、商人たちは、支払う側が1回、受け取る側が1回、最後に両者が一緒に確認することで、少なくとも3回はカネを数える。しかし、そのような慎重さとは対照的に、はじめて取引する相手に対して、思い切って信用取引（Nyamaandé）でウシを売ったりする。たとえば、わたしのウシの先生、ズベイル（60代男性）は、大きなウシ1頭を、肉屋を営む男性に33万フラン（約8万円）で売却した。そのうち、10万フランはその場で支払われたが、残りの23万フランはきたる日曜日に支払うという約束だった。だが、その後、今日まで2週間経っても肉屋の男は姿を見せない。

市を見渡すと、もう一点気になることがある。それは、取引に参加せず、またウシの世話もせず木陰に入っておしゃべりをしている人びとだ。2度目の滞在となった2023年8月、わたしは日曜の大きなウシ市に来ていた。そのなかに、見覚えのある姿があった。牛飼いのイッサ（40代男性）だ。彼は、コーラナッツを齧りながら、友人とおしゃべりを

しているところだった。わたしに気づくと、「マヤ！久しぶり、よく来たね。ようこそ！」と手を振って、わたしをファードに招き入れた。彼は、はじめて滞在した時、ウシのことをいろいろ教えてくれた牛飼いだ。だが、わたしは彼との再会の喜びとともに、ちょっとした気まずさも覚えていた。

2023年1月、ある友人からボイスメッセージが届いた。

「イッサが預かっていたウシのうち3頭を勝手にウシ市で売ったと聞いた。」

「そのカネで、タバコと酒を買って、街で女と遊んでいたらしい。」

友人によると、彼はたちまち「盗人」と人びとにうわさされるようになった。ウシを取り上げられ、仲間や家族からも見放された彼は村を出て、タクシー運転手をやるらしいということだった。

しかし、この日彼は以前とかわらずウシ市にいた。それだけでなく、毎週ウシ市に来ている。彼はタクシー運転手になることもできず、またウシの仕事を捨てることもできず、

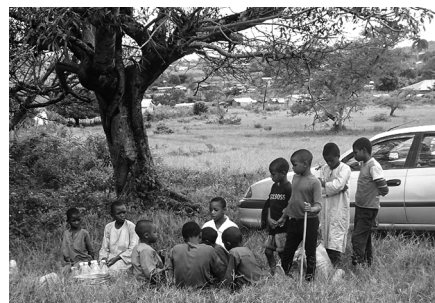


写真4 ウシ市のようす

大人たちだけでなく、子どもたちもおしゃべりに忙しい。

今日もウシ市で同じく仕事のない友人たちとおしゃべりをしている。ただ、以前と異なるのは、彼はもう市に連れてくるウシを持っていないし、彼にウシの輸送や飼養を頼む人もいないということだ。

わたしは、彼が本当にウシを勝手に売ったのか、なぜそのようなことをしたのか、いまだ聞き出せずにいる。ウシ市で彼と再会の握手をした日、陽気な挨拶とは対照的に周囲から避けられている彼の表情は少し曇っていた。その目が、「自分は何もやっていない」と伝えていたのか、それとも外部者のわたしに「仕方なかったのだ」と理解を求めていたのか、わたしにはわからなかった。

それとも、華やかなウシ経済を下支えする牛飼いたちの生活苦やその仕事の大変さがほんの少しわかったことで、彼に同情しているのかもしれない。いずれにせよ、それ以来、ウシ市や街中で彼を見かけるが、まともに話もできていない。

今日も、ウシ商人たちが賑やかにやりとりする市の片すみで、ウシを捨てられない彼はおしゃべりで暇をつぶしている。いつか自分のもとにウシの仕事がかえってくるのを待っているのだろう。すすまない調査から逃げるようにおしゃべりに参加するわたしよりも、少しばかり真剣に、そして切実に。

自己のなかの「他者」と向き合う

——月経経験のオートエスノグラフィーへ向けた試み——

荻 野 なつれ *

ウシと鶏の鳴き声で目が覚めた。起床後すぐに向かったお手洗いで、自身のショーツに滲む経血に、こころのなかで「このタイミングかぁ…」と呟き、肩を落とした。

ラオス人民民主共和国（以下、ラオス）の首都ヴィエンチャンから北へ車で約2時間、この調査地とも気付けば4年の付き合いとなっていた。稲作や家畜飼育を主な生業とす

るこの村で複業的におこなわれているのが、タケやラタンを用いたタケ籠や腰掛けイスなどの手工芸品製作だ。タケ籠を編む技術、女性たちが集って製作をする光景に惹かれ、日々、タケ籠に用いるタケの種類や技術習得の過程、それらの販売経路に関する情報を集め、自らもタケ籠を編む技術を学びながらフィールド生活を送っていた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科